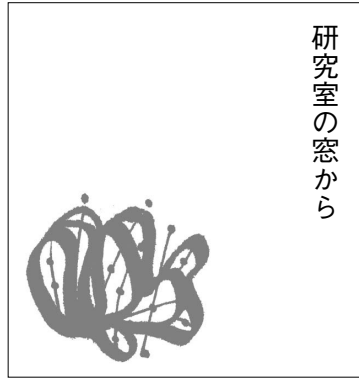


研究室の窓から



高度情報化・

メディア化社会の光と影

飯島 伸彦

はじめに

名古屋市立大学人文社会学部(現代社会学科)は九六年に設置された学部・学科であるが、そこで私は社会構造・変動論、政治社会学(政治とメディア研究)などの科目を講義している。はじめは現代

政治を中心にしてきたが、現在は、政治について直接とりあげるという比重は低下してきており、メディアをつうじて流れてくる政治、文化、消費、生活等々の情報の質を検証するというテーマに中心が移ってきており、授業や演習などで講義している内容も日常生活における「情報の政治」に移行してきている。それは政治自体について学生が直接興味を持ちにくいということもあるし、身近な日常生活Ⅱ文化や情報消費化、メディアのなかに入り込んでいる「政治」を読み取るリテラシーを高めることのほうが教育として「効果的」であるということにもよる。以下、高度情報化・メディア化について私の基本的な見方を述べていきたい。

メディア化・高度情報消費化の研究

情報化社会という言葉は新聞やテレビでよく聞くことと思われるが、九〇年代

に入ってから、高度情報化社会・メディア化ということばが頻繁に使われるようになった。現代社会は高度情報化社会・メディア化という大きな変化のなかにあり、私たちの日常生活における考え方・感じ方も高度情報化・メディア化に大いに関わっており、様々な現代的な社会現象は高度情報化・メディア化と関わらせて、考察することがどうしても必要になってきている。

例えば、九〇年代に入ってから起きた様々な事件や社会現象は、マスメディアの果たした役割を抜いては論じることができない、そういった社会現象ばかりである。九五年には阪神淡路大震災があり、オウム真理教の事件があった。それ以降、少年を巡る残虐な事件、衝撃的な事件、バタフライナイフを使った事件などもあった。社会的・風俗的な現象についても、政治・経済的な現象についても、国際的な事件(九・一一テロ以降の事態など)についても、私たちはメディアを通じて

様々な情報を毎日大量に受容している。そして単に情報を受容しているというだけではなく、感じ方・考え方・意見などもメディアを通じて形成している。

特に問題なのは、メディア以外からはあまり情報を得ていないという事態が進んでいることである。阪神淡路の大震災とその後の事態も、オウム真理教の犯罪・事件も、ワイドショーなどが中心になって盛り上がったサッチー現象も、小泉人気も人気低下も、田中真紀子現象も鈴木宗男現象も、メディアによって引き起こされているという面があると同時に、それらの現象についての情報の大半を、テレビやそれ以外のメディアを通じて、私たちは得ている。直接、田中真紀子や鈴木宗男の人物像に関する情報を得るという機会はほとんどない。震災や、神戸の残忍な事件についても、大阪の池田小学校での小学生殺傷事件も、小泉純一郎についても、ニューヨークのテロ以降の一連の事態についても、メディアを通じ

て、事件や事実を知り、事件の衝撃度を知り、その後の混乱や反響を知るといのが実情である。

メディア依存を強める

現代社会

情報論的な観点から見ると、私たちはメディアが伝える情報、つまり直接私たちが見たわけではない間接情報を日々大量に受容していることになる。仮に直接自ら見たり人と話したりして得た情報を一次情報と言ふとすれば、私たちは、二次情報、三次情報、四次情報をもとにして、現代社会についてのイメージを形成していることになる。いわば、メディアという「窓」を通じて社会を見ていることになる。日常生活で、職場や家庭で、そして通勤途中などで、駅や町で様々な人と話したり、様々な事象・現象を見たりするわけだが、そして、そうした現象を見ることによって、「不景気だなあ」「最近の若者は礼儀がなっていない」

「乱れている世の中だ」などと思ったり、感じたりもするわけだが、直接自ら得る情報の比重は低下している。テレビや新聞、ラジオ、インターネットなどから得る間接情報の比重が増大している。また、考え方・感じ方・価値観の形成に与えているメディアの影響力も強くなってきている。場合によっては直接見たり聞いたりする現象も、メディアという窓によって形成されたフレームを使って見たり解釈したりしている。感性や感受性、理性もメディアを通じて形成されている。私たちはいわば「メディア依存社会」の中に生きていくことができる。

生活に必要な情報、そのほとんどを、メディアから得ている、その得ている度合いが飛躍的に増大した社会。メディアがなければ生きていけないと感じてしまうほどにメディアに依存してしまっている社会、それが「メディア依存社会」である。地域社会や職場、家族から伝達される知識や情報に依存するのではなく、

様々なメディアからの知識や情報に依存する社会になってきている。ちなみに、日本人の生活時間調査などによるとこの十年間に、週休二日制が普及した結果、土曜・日曜の労働時間が減少したけれども、休日の時間の過ごし方は、テレビを一人で見るとというのが増大してきている。また、子供が成人に達するまでに学校で過ごす時間とテレビをみる時間を比較すると、はるかにテレビをみる時間のほうが多いというデータもある。ちなみに、日本人の睡眠時間は、この十年間で数分ではあるが減少している。働きすぎの日本人といわれることが多いが、現代日本人は睡眠時間を削って、多忙な時間を過ごしている一方、それ以外の余暇時間は一人でテレビを見ているという日本人像が浮かび上がってくる。

メディア依存社会Ⅱ

メディア情報に操作(踊ら)されやすい社会

れやすい社会

私たちは日常生活の様々な面においてメディア依存を強めている社会に暮らしているわけだが、高度情報化・メディア化社会は私たちが入手しうる情報の量・多様さの面で圧倒的に豊かになった社会という側面をもつ。生活に関する様々な情報を様々なメディアから得ることができ、そのなかから最もよいと思われる情報をもとに意思決定・行動を選択することができる社会が実現しつつあるという側面がある。例えば、何かいい健康法はないだろうかとか、風邪を引いてしまつて困つたというときに、何から情報を得るかという点、テレビとか新聞などが番組をタイミングよくやっていけば、今年の風邪はこうこうこうで、だいたいこうすればいいらしいなどの情報を得ることができ。他方で、情報が多様に満ち溢れている社会は、情報に依存しすぎる社会である。流行現象が典型的に情報・メディアによって引き起こされている現象だが、健康ブームやグルメブーム、ダイ

エットブームなどもその多くはメディアが生み出し、増幅し、そしてさらに消費させている面が強い現象である。ブームや流行はもちろん、何から何までメディアによって作為的につくりあげられるわけではないのだが、そして、個々のメディア関係者にヒアリングなどで聞いてみると、流行はメディアによって作り出せないという反応が多数派であるが、個々のメディアではなく様々なメディアが複雑に作用しあって、ブームや流行を作り出している。そのなかには個々の送り手の意図を超えて起こる現象がある、ということだろうと考えられる。メディアの個々の送り手に操作されているというよりは結果としてメディアによって操作されているという現象が起こっている。

メディア依存社会の病理と

メディア・リテラシー

一九九四年に起きた「松本サリン事

件」は、このようなメディア依存社会の典型的な病理であつたと考えられる。個々のメディアが意図して河野さんを犯人にしたあげようとしたわけではないにも関わらず、熾烈な報道競争の結果として検証ぬきの報道が先行してしまい、人権をブルドーザーのように踏みじる事態が進み、メディアの情報に基づいて匿名の市民による手紙や無言電話が繰り返されたという事態。集中豪雨的な報道とそれをうのみにする受け手・市民の問題。引き出すべき教訓は何なのだろうか。一つは送り手の問題。クロスチェックと言う言葉があるが、クロスチェックとは情報を情報源までたどっていき事実と突き合わせる、あるいは異なる情報があるときにどちらが真実であるか確かめる作業をする、ということである。この「松本サリン事件」の場合には、テレビも新聞もクロスチェックを怠つた。つまり、警察からのリーク情報をうのみにして、他社が報道するからこの人が犯人に違

ないという報道の仕方をした。(背景には、「横並び主義」「特オチ」を過度に恐れる日本のマスコミの体質がある)。二つめは、受け手の問題。視聴者もクロスチェックすべきだ。その場合に、視聴者はいちいち現場にいつて、警察や被疑者に聞くわけにいかないから、間接情報のクロスチェックをすべきということになる。ところが、この事件の場合はほとんどあらゆるメディアが同じ方向で報道していたから、視聴者はチェックできなかつた。それを避けるためには、いまだに確実な証拠が示されていない場合には、むやみに報道だけで、それを真実・事実だと思わないという批判的思考習慣を身につける必要がある。受け手は一次情報にアクセスすることが困難であり、また一次情報が常に正しいとは限らないのだから、それを前提にしたうえで、メディアを批判的に読み解く能力(メディア・リテラシー)を組織だつて育成していく必要がある。

現在進んでいるインターネットの普及は情報入手経路の複雑化・多様化をもたらしている。このような複雑化・多様化が個々人々のメディア・リテラシーを高める方向につながっていくのかそれとも匿名かつ無責任な情報の増大を生み出し、操作されやすい受動的な「大衆」社会を結果するのは注視しなければならぬことである。

このような主旨で、講義科目、演習科目、実習科目(社会調査実習などの科目を、時事的なテーマなども取り込みながら進めている。

いじま・のぶひこ
名古屋市立大学・人文社会学部